interview ―⑤―

ひと

映画「Shall We ダンス？」やテレビのバラエティ番組の影響もあって、ブームを巻き起こしている社交ダンス。若者から高齢者まで幅広い年齢層の人たちが気軽にダンスを楽しんでいます。そのダンスのプロが集まる大会で、目覚ましい活躍を見せるダンサーが宇城市にいます。松本達明さん・美紀子さん夫婦（松橋町曲野）。家族でダンスを楽しんでいる松本さん一家をご紹介します。

左から松本達明さん、美紀子さん、賢一さん、美千子さん。後ろには数々の戦歴を物語るトロフィーやカップ、賞状などが所狭しと並べられています。「音楽に乗って気持ちよく踊れることがダンスの楽しみです」と口をそろえる松本さん一家

ダンスへの道――終わりなき挑戦

このほど、ダンスの西日本選手権大会とアジア選手権大会が開かれ、プロラテンアメリカン部門で見事優勝を果たした松本達明さん・松本美紀子さんカップル。お2人は、市内でダンススクールを営む松本美千子さんの息子夫婦です。達明さんの弟・光祐さん夫婦（東京在住）もプロのダンサーで、アジア大会2位、前期イーストジャパン選手権大会優勝などの輝かしい成績を収めています。

母親であると同時にダンスの師匠でもある美千子さんは、息子夫婦たちの活躍に「うれしい限りです」と控え目。昨年銀行を定年退職した父親・賢一さんも現在はダンススクールを手伝うなど、家族でダンスの素晴らしさ、楽しさを伝えています。

ダンススクールの家に生まれたとはいえ、達明さんがダンスを本格的に始めたのは18歳からで、ダンス歴は約13年。これほどの成績を収めるまでには、険しい道のりがあったようです。

「毎年海外へレッスンに出掛けますが、現地での会話（英語やドイツ語）に苦労しました。また教室で生徒に教えた後に、自分の練習時間をつくるのは厳しいものがありました」と達明さん。現在、ダンスのパートナーであり、妻でもある美紀子さんは、高校時代の同級生。ダンスに興味を持った美紀子さんが20歳で習い始め、それをきっかけに2人は付き合い始めました。結婚してからは、お互いを人生の良きパートナーとして、二人三脚でダンス三昧の日々を送ってきました。

「練習しても成績が出ない。伸び悩んだ時期もありましたが、3年前から成績は上向きになりました。海外での勉強の成果が出たんだと思います」と振り返る2人。「日本各地、海外など月2回のペースで大会に出場しています。いろんな人との出会いが貴重な財産です」と話します。

これからの目標を聞いたところ、「ダンスの世界は奥が深く、終わりがありません。常に挑戦する気持ちを持っています。今後は、全日本ファイナリスト（決勝進出）を目指します！」と力強く答えてくれました。

高い志を持つお2人のこと、この目標は近いうちに達成されることでしょう。松本さん一家のご活躍を期待します。

華麗なテクニックで観客を魅了する達明さん・美紀子さんカップル。2003年度・2005年度のダンスアワード日本プロスポーツダンス大賞ラテンアメリカン部門ＪＤＣ公認ダンス競技会で年間優秀選手賞を受賞

派遣職員の 東京見聞録

市派遣職員が、今の仕事や市外から見た宇城市の様子を報告します。今月は熊本県市長会東京共同事務所の野村烈さんです。

「明日の神話」という壁画をご存じですか？ 最近テレビでよく報じられているので、ご存じの人も多いのではないでしょうか。

この壁画は大阪万博のシンボル・太陽の塔を制作した岡本太郎氏が、１９６８年ごろにメキシコのホテルに飾るために描いたもの。しかしホテルが未完成のまま放置されたため、長い間行方不明となっていました。そして２００３年秋、壁画が発見され、修復の後、つい先日、汐留の日本テレビ前の広場で一般公開されたのです。早速見に行ってきました。

まずは少し離れて正面から拝観。はっきり言って私には意味不明でしたが、異常な重圧を感じた気がしました。その後、解説を熟読。『原爆が炸裂する瞬間は悲劇の世界だが、炸裂した瞬間にそれと拮抗する激しさ、人間の誇り、純粋な憤りが燃えあがる。残酷な悲劇を内包しながら誇らかに「明日の神話」が生まれる。』とあります。

唯一の被爆国である日本は、まさに「明日の神話」を体現して復興し、同時に核兵器の残酷さを知る国として核廃絶を世界に訴えてきたと思います。今回のミサイル発射など、国益のために核関連兵器をちらつかせることは、日本人として絶対に許せないと感じた１日でした。

ウキウキ宇城市 友達の輪

今月は不知火町桂原の石原とも子さん（46歳）です。

お仕事は？
農業で、主にミカン（極早生）とデコポンを作っています。

趣味は？
いろいろあります。特にパッチワークを５年ほどしており、小物やタペストリーなどを作っています。

最近凝っているものはありますか？
子どもが高校でサッカーをやっており、その応援にはまっています。

夢は何ですか？
子どもの夢の実現に手助けをすることです。

何かメッセージはありますか？
健康づくり推進員をしており、今年２月にウォーキング大会を企画しました。その時、コース選定のためにいろいろと調べて、地元『桂原』が素晴らしい土地という事を再認識しました。『蕉夢庵』や『九勝之石』など史跡あり、豊かな自然あり、皆さんもぜひ、一度おいでください。また、自作のパンフレットも必要ならば差し上げます。

メリッサ・パウロ先生の 日本つれづれ日記

ALTとして不知火中などで活躍中！

「大好き！　日本食!!」

「日本の食べ物はどう？」とアメリカの家族や友人によく聞かれます。日本に来る前は、日本の食べ物については、照り焼きビーフ、天ぷら、すしなどしか知りませんでした。

しかし、日本とわたしには大きな共通点があり、それに気が付くのに時間はかかりませんでした。その共通点とは、食に対する探究心ということです。日本に着いて初めての日、新宿を散策しました。レストランの入り口に置かれている本物のような食べ物の見本や、至る所にある過剰なまでの自販機、空港や駅にある多くの積み上げられたおみやげ箱などに魅せられました。そして、熊本に着いてすぐわたしたちの担当者は、素晴らしい食体験の改革とも言える回転ずしに連れて行ってくれました。その時、これから日本の素晴らしい料理の探求を楽しめることに気付きました。

「馬刺しは食べたことがある？」と多くの熊本の友達に聞かれました。熊本の特産物について少し調べてみて、生の馬肉、からしレンコンが最もおいしいく有名であることに驚きました。

旅行に出掛けると、日本の友達にその地域特有の食べ物を推薦されたり、おみやげを頼まれたりします。「博多ラーメンを食べてみて」「広島のお好み焼き（わたしのお気に入り！）と、もみじまんじゅう」「長崎のカステラ」「神戸牛（高い！）」「京都の漬物と八橋」「東京のチョコバナナ」…というように。日本のその地域の食べ物を経験することは、私の旅行の楽しみの一つになりました。

日本について何年後かに思い返せば、友達との楽しい出来事を思い出すことでしょう。その中には食べ物についての思い出も多く含まれると思います。夏に焼肉バーベキューをしたこと、不知火のデコポンをもらったこと、祭りの花火の下でたこ焼きとラーメンを食べたこと、冬に不知火中の先生たちと一緒にぜんざいと雑煮を食べたこと、夏の暑さを克服するためにそうめんと黒ゴマアイスを食べたこと…

アメリカに帰った後も、私は日本の食べ物に夢中だと思います。いただきます！　うまかばい！